夫は妻を愛している　追加　特典ＳＳ

【君の選択】

僕の仕事は出張が多い。

次の出張は以前に行ったことのある場所。仕事があるのは一日だけ。でもそれでとんぼ返りするのはもったいないかな。

そのまま休日に突入するから、じゃあ、せっかくなら、続けてプライベートで旅をするのもありだろう。

離れてるときだって、僕は君のことをたくさん考えてる。

出張先でもちゃんと、情報収集してたんだから。君と一緒に過ごすときのために。

君とあの景色を眺めたい。喜んでくれるといいな。

食事はあのレストランにしよう。雰囲気がとてもよかったし。

ああ、でも、ホテルは変更。味気ないビジネスホテルじゃなくて、ふたりの時間を楽しめるところを選ぼう。

よし、と、僕は決意して、君に提案する。

「今度の出張、一緒に行く？」

君はすぐさま目を輝かせて、行く！　と返事してくれる。
ほんとに、とても、うれしそうで。僕はそれで、安心する。

もし一瞬でも。返事をためらわれたら。
だって、それは、つまり。
僕がいない間は、君は実家に行って。お義兄(にい)さんに、会えるから。
だから、僕と旅行するより、そっちの方がいいって思われてたら。
僕は救われないもんな。

なんて、どろりとした気持ちは全部隠して。僕は君に笑顔を向ける。

「絶対行くって言うと思った」

僕は誰かの代わりに選ばれたんじゃない。
僕は僕だから、君の夫になれたんだ。

僕は何度も大好きだって君に言う。
君はそのたび、私も大好き、って、ちゃんと答えてくれる。

僕は胸を張って誰にだって言える。
妻は僕のことを、愛している。

◆

夫婦旅行の時間は、とても有意義で、とても楽しい。
ふたりでずっとこんなふうに、旅をするのもいいけれど。
家に帰ってゆっくりのんびり、君のことを抱きしめたくもなるから、僕も相当わがままだ。

立ち寄った観光地のお土産売り場で、僕たちはあれこれ、品定め。

「お土産買ってこ。ご実家に」

いろいろ悩んで見て回る。義両親が喜びそうなもの。彼女が実家に帰ったときに持っていくから、ついでに一緒に食べたいもの。うち用にも買って帰ろうか、なんて言ってたときに。君が棚の

前で足を止める。

――きれい。

君がつぶやいた言葉と、視線をたどってみれば。その棚にはずらりと、瓶詰めのジャムが並んでいた。

このあたりの特産品、らしい。色とりどりの瓶が並ぶ様子は、確かにとてもきれいだった。

オーソドックスな果物、それから野菜や、木の実まで……、ああ、ワインのジャムなんてものもあるんだ。

パッケージには、それぞれの材料を模したレトロなキャラクターが印刷されている。

君はそっと、その中のひとつを手に取った。
それを見て、僕はすぐにわかってしまった。君が今、何を考えているのか。
大丈夫。こんなことで、僕の心は乱れない。

「あ、いいねそれ。お義兄(にい)さんにお土産、だよね？」

パッケージのキャラクターの雰囲気が、あの人に似てる。
君の表情からもなんとなく伝わってくるから。そういうの。
言い当てられたことに驚く君に、僕はやっぱり、と、笑う。

「わかるってー。これ、お義兄(にい)さんに似てるし」

僕の言葉に、君は素直に同意する。

――似てるよね？

「似てる似てる」

お義兄(にい)さんの話をするとき、君はとても楽しそう。それはちょっと悔しいところだけど。

これまでは僕と一緒にいる時間より、あの人と一緒にいる時間の方が長かったんだから、仕方ない。

でもそのうち逆転するから。僕の方がずっと長く君と。君の時間を、一緒に過ごすんだ。これからは。

ふいに君が手を伸ばし、もうひとつ、別の瓶を棚から取る。
ちらりと目配せする君に、僕はうなずく。

「あ、こっちは僕に似てるよね」

――そう。かわいい。

かわいい、と言われて、少し照れる。君からの褒め言葉はどれもこれも宝物みたいだ。
ありがとう、と言いながら。僕も棚から、また違う瓶をひとつ選んだ。
ここにある、全部の中で。いちばん僕の、好みなやつ。

「でもお土産にするならこっちかな。これ、お義兄(にい)さん喜びそう。君に似てるもん、これ」

だから絶対好きだと思うよ。お義兄(にい)さんも。

でも、譲るのは嫌だから、もうひとつ。僕は同じものを手に取った。

「ん、僕も自分にお土産だな」

すると君は僕に、両手に持った二種類の瓶を、これも、と見せてくる。

どっちか選べ、なんて僕は言わない。

全部かなえてやりたくなるんだ。君の願いは、なんでも。全部。

「はいはい、君も自分に、両方ね」

僕の返事に、君は満面の笑み。

うん。君がそうやって笑ってくれるのが、僕はいちばんうれしいんだ。